

続々「子、親を選べず」その二



© Can Stock Photo

「おとう、おかん、大変そうやったで。お金ない、言うて」

「さよかあ。いつものこっちゃな。稼ぐに追いつく貧乏無しや、ねんけど、な」

「何、それえ」

「経済の大原則や。出費以上に働いて稼いでいれば、お金が足りなくなる事はないいう、こつちゃ」

「使わず、ちゅう事？」

「結論は、な」

お父さんはお母さんが、金欠になると直ぐにも自分の実家に行ってお小遣いを無心していることを余り好ましく思っていない様でした。

「わしにせびるのはええ。別れた後と雖も出た先やからな。しやけど一旦出た親元にせびるのは筋違いやで。線引きの仕方、ちやうねん。それに~~出~~過ぎた大の大人なんやからいつまでもお嬢気分では、困るのよ」

お父さんはそう言うて、手元の封筒にお札を何枚か入れて、真之介君に渡しました。

「使うに追いつく金持ち無し、やで、わし」

困った時のお父さんの口癖は「なんやの、それ、堪忍してよ」でした。

一方お母さんの口癖は「大変なの、とにかく大変、私の方が、もっと大変」でした。

国語が余り得意ではない真之介君でしたが「堪忍してよ」と「大変なの」は同じような言葉でも、何か全然違う様な気がしました。

そういえばお母さんが未だ家にいた頃、会社の仕事でお父さんが徹夜明けで帰ってきて

「ああ、疲れた。堪忍してや」と誰にとはなく独り言を呟くと、決まってお母さんは自分に向けられた訳ではないその言葉を掬い上げて

「大変なのお互い様。私だって大変なの。私の方がもっと大変なのよ」

と必ず言って苛立ちを露わにしていたのを思い出しました。それをみると、真之介君はとても憂鬱な気分になりました。

目に見えない水面下での神経戦、平たく言うとお互いの足の引っ張り合い、隠れ意地悪のし合いっこの様なものを感じたからです。

「おとう、何でおかさんを結婚したん？」

「まっ、若気の至り、かなあ。お恥ずかしい限りで、おま」

そんなもんで、結婚。

真之介君は可成り驚きました。

「大人って、結構アホなん、なあ。しやけど、相当に面倒いなあ。余り、なりたいもん、ちやうなあ」

そこ迄考えると、何となく又元のふらふらグラグラに戻ってしまいそうだったので、真之介君は、それを切り替えようとお父さんに質問しました。

「おとう、探検隊員になるにはまず何したらええん？」

「科学博物館に行くとか、ネットで調べるとか、まずは、近所の野原を試しに掘り返してみるとかやろうなあ」

「そんなん、盲滅法に掘り返しても、何かが出てくるとは思えんけど」

「子供の頃、おとうもそれをしたが、千円札掘り当てた事があったで。最初から諦めたらあかんね。まずは何でもやってみいや。だめやったら、その時又次の手を考えりゃ、よかとよ。

わしみたいに、副産物手に入れる事もあるし。ええ事は大概いつも瓢箪から駒やで」

「又煙に巻きよる。これはもう自分で考える他、なかあばってんがさと、真之介君は思いました。」